



観音経浄土曼陀羅図 (当麻曼荼羅図)

阿弥陀浄土へのいざない

令和 7 年

3 月 1 日 (土) ~ 6 月 3 0 日 (月)

開館時間 9:00 ~ 16:00



HP



X



Instagram

常楽寺美術館

〒386-1431 上田市別所温泉 2347 TEL0268(37)1234 FAX0268(38)8545 Eメール kitamuki33@gmail.com

入館料：大人500円、高専大生300円、小中生100円、身体障害者350円、団体30名以上1割引

後援：上田市、上田市教育委員会、別所温泉観光協会、株式会社上田ケーブルビジョン、

上田電鉄株式会社、週刊上田新聞社、信州民報社、東信ジャーナル社

阿弥陀三尊来迎図



展示作品・資料の御案内

極楽浄土の仏として知られる阿弥陀如来は、苦しみで満ちたこの世を離れ、浄土への生まれ変わりを願う人々の信仰を集めました。とりわけ、信者が亡くなる際、阿弥陀が現世まで迎えに来る「来迎」を期待する人々は多く、この姿を表した彫刻や、来迎の場面を示す絵画が盛んに制作されました。

本企画展では、当館蔵の13世紀前半鎌倉時代の阿弥陀如来像や、江戸時代に複製された奈良県当麻寺の綴織当麻曼荼羅図の縮小模本、南北朝時代以来の来迎阿弥陀図などを展示します。

当麻曼荼羅模本ほか浄土曼荼羅

天平宝字4(760)年に、中将姫が蓮糸で織ったと伝わる当麻曼荼羅図の縮小模本の中央には、荘麗な阿弥陀如来の西方極楽浄土を描き、その左辺には阿闍世太子の悪逆物語、右辺にはこの浄土世界を観想するための方法と手段を十三の象徴で表し、下辺にはこの極楽に迎えられるための来迎図に向って右から左へ、九品にわけて描いています。

本展ではこのほか、阿弥陀如来を中心に千体仏図を描いたものや、勧善懲悪をすすめるための絵解図、比叡山における神仏習合の垂迹関係を表した曼荼羅などを展示します。

ろくじみょうごう 六字名号

六字名号は、「南無阿弥陀仏」の六字を揮毫した書のことです。常楽寺55世、第256世天台座主半田孝淳の書のほか、第253世天台座主山田恵諦、山岡鉄舟の書などを展示します。

阿弥陀来迎図

南北朝時代の作品2幅は、中央に来迎印を結ぶ阿弥陀立を、左右に蓮台を捧げる観音と合掌する勢至菩薩を描き、いままさに臨終のときにある者を、飛雲に乗って迎えに飛来する姿を表します。

このほか、日本浄土教を確立した恵心僧都源信が考案した山越阿弥陀来迎図や、善光寺阿弥陀三尊が俗人を救う図を展示します。

板絵着色踊り念仏と六歌仙図(上田市指定文化財)

輪になって踊る人々と、車座に坐る六歌仙を描いた二面一対の絵馬です。踊り念仏は鎌倉時代の時宗の祖、一遍上人がおこした、南無阿弥陀佛と唱える念仏三昧の踊りです。この踊り念仏の名称は寺伝によるもので、持物の小道具から鹿島神宮に端を発する鹿島踊りともいわれます。

徳川家康日課念仏

家康は天台、浄土の両宗に帰依し、「南無阿弥陀仏」六字の名号を書写するのを常としたといいます。展示資料は、3紙、6段に名号を書し、各段111返すべて666返を記しています。第二紙末に「慶長十七年六月九日家康」「八月十七日家康」などの記が見出され、家康作善の日常を示す興味ある資料である。

阿弥陀如来立像と地藏菩薩立像(展示3/20～)

阿弥陀如来立像は、13世紀前半～中頃、鎌倉時代の造像です。衣文はすっきりと整理されており、右胸前に覆肩衣のたるみを表わして、下腹部にU字の衣文を繰り返す、両脚部には正中を軸にした双曲線を配するのは、鎌倉時代に快慶によって生み出された安阿弥様の形式を踏襲し、小像ながらよくまとっています。

また、平安時代後期12世紀作の地藏菩薩立像があります。地藏菩薩は六道(天道、人道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道)を巡り衆生を救済教化する菩薩で、日本では平安時代中期から、阿弥陀信仰とともに盛んに信仰されました。

北向観音・常楽寺開創1200年

北向観音と常楽寺は、天長2(825)年慈覚大師円仁によって創建されました。常楽寺には、北向観音の出現霊地を示す石造多宝塔(重文)があります。また、北向観音は、常楽寺から飛翔した千手観音菩薩がとどまった地として、秘仏千手観音菩薩像を本尊として開創されました。

本年は、開創1200年を記念して、御開帳・企画展等のイベントを計画しています。